

平成31年度

一般入学試験A日程 学科試験問題

国語

1. 試験時間は、60分間です。
2. 問題は、この冊子の1～21ページにあります。解答用紙は別に2枚あります。
3. 解答は、解答用紙の問題番号に対応した解答欄に記入してください。
4. 問題や解答を、声に出して読んではいけません。
5. 印刷の不鮮明、用紙の過不足については、申し出てください。
6. 問題や解答についての質問は、原則として受け付けません。
7. 終了の合図があったら、すぐ筆記具を置いて、解答用紙を机の上に伏せてください。
8. この問題用紙は、持ち帰らないでください。
9. 不正な行為があった場合は、解答をすべて無効とします。
10. 答案の文字は、ていねいに、かつ明瞭正確に書いてください。
11. その他、試験の進行については、監督者の指示に従ってください。

植草学園大学 発達教育学部

受験番号		氏名	
------	--	----	--

第一問 次の文章を読んで、後の問い（問1〜6）に答えなさい。

《ある控えめな男のためにお祝いの会が開かれた。集まった人々は、ちよūdい機会とばかり、てんでに自慢をするやら、褒め合いをするやらで時間の経つのを忘れた。食事も終わろうという頃になって人々が気がついてみると——当の主人公を招くのを忘れていた。》

こういう話がチェーホフの『手帖』のなかに出てくる。主人公をそつちのけにして賑わった祝賀会の奇妙さ、理不尽さを描いたものだ。大きな転換期を迎えて、近年いよいよ明らかになってきているアキセイのさまざまな理論や学問と現実とのずれを見てみると、この話を思い出してしまう。

ただし、ここで厄介なのは、この《現実》というのが、直接に素手で掴めるように、どこかにころがつているものではないことである。だからこそ、その存在を浮かび上げさせ、できるだけ立ち入って捉えるためには、工夫を凝らす必要がある、いろいろな理論や方法が考え出されたのであった。たとえば、《事象そのものへ》をなよりのモットーにした《現象学》の方法が、イセイイチに練り上げられ、実践に際して細心の注意を必要とされるのは、そのいい例である。他方、肝心の《現実》の方はまことに控えめなので、いざとなってその不在がはつきりするまでは、その不在がわからない。そのこともこの話の主人公と同じである。

さて、そうしたさまざまな理論、学問、方法のなかでもっともパワフルで厚く人々に信頼されてきたのは、いうまでもなく《近代科学》である。近代科学というと、誰でもわかった気になる単純さがあるけれど、実は多くの要因から成る複雑な構成体である。その点はあとで詳しく述べることにして、いまは単純化して理解していただいていい。この近代科学ほど、人類の運命を大きく変えた人間の所産はほかに例がない。あまりにつよい説得力をもち、この二、三百年來文句なしに人間の役に立ってきたために、私たち人間は逆に、ほとんどそれを通さずに《現実》を見ることができなくなってしまったのである。

もつとも、《現実》とのずれが見やすく、次第にはつきり気づかれるようになったのは、自然科学そのものではなく、基本

的に自然科学をモデルにして科学性をめざしてきたさまざまな形態の社会諸科学であった。そのなかには、科学性を政治的にも旗印にして〈科学的社会主義〉を唱えたマルクス主義の社会理論も含まれている。マルクス主義の社会理論の場合には、ソヴィエトや東欧諸国のドラスティックな自由化のなだれ現象によって、^A現実への妥当性について答がはつきり出るという結果になったけれど、もっと地味なほかの社会諸科学の理論の場合にも、人々の心を捉えきれなくなってきたり、またなによりも、現実とのずれは否定しがたくなってきている。

(そのことを率直に認めて社会科学の再建をはかった貴重な企てとして、A・メルツチの『現在に生きる遊牧民』での考え方を取り入れた山之内靖の論文「システム社会の現代的位相」『思想』一九九一・六一七がある。そのなかで山之内は、人間の感覚は頼りがいがなく、理性によってこそ背後にある確実な構造が認識可能になるのだ、という一般的前提は変更を迫られ、それに代わって社会理論においても『身体的経験にもとづく認識に新たな意味が生じてくる』、と言いきっている。なお、精神分析医として社会活動もしたメルツチの理論中には、山之内も指摘しているように、私の〈臨床の知〉に通じる考え方がある。)

社会諸科学にくらべると、近代科学の中枢をなす自然科学の方は、現在でもまだ依然として有効性が大きいから、〈厳密科学〉(精密科学)としてのその有効な部分だけ見て、^B現実や人間経験とのずれの方を見ない人、見たがらない人が、まだ圧倒的に多い。しかし、近代科学の自然観が、自然をもっぱら人間のために役立たせる技術的開発の対象としてきたこと、したがって生態系つまりは地球環境の破壊をもたらすに至ったことはいまや明白であろう。また、高度に自然科学化し、技術化した近代医学が、たとえば集中治療室などに象徴されるように、医療の現場において、人間らしい患者の扱いからいよいよ遠ざかることになり、関係者だけでなく社会全体にウシンコクな反省を迫ってきていることも周知のとおりである。

では、一般的にいつて、近代科学が無視し、軽視し、果ては見えなくしてしまった〈現実〉あるいはリアリティとは、いったいなんだろうか。これもいまこの〈序文〉では、大ざっぱに言うておくしかないが、その一つは〈生命現象〉そのものであり、もう一つは対象との〈関係の相互性〉(あるいは相手との交流)である。この二つは互いに結びついているが、ここでは一応分けて扱っておこう。

あるいはひとは、生命現象だったら近代科学は十分扱ってきたではないか、と言うかもしれない。たとえば、分子生物学

やそれにもとづいた（ヒト・ゲノム）（人間の遺伝子）研究のような輝かしい成果があるのだから、と。けれども、操作主義の極致としての分子生物学が捉えているのは、原子論的に分子のレヴェルに還元された生命体の要素とその機械論的な組み合わせであって、生命現象そのものでも、生命現象の固有の、あるいは少なくとも特徴的な働きでもない。したがってそこでは、生命現象のもたらす意味の発生、自律的な振舞い、自己創造などが真つ向から扱われることがないのである。

なお、〈生命現象〉の重視に対して、「生命」の偶像崇拜」と名づけられた批判が、I・イリイチによってなされていることを私も知らないわけではない。それについては、のちに第I章第2節の終わりで論じることにする。

〈関係の相互性〉についても、現代物理学の量子論において、すでに、観測データは観測のための光や観測者の存在によって変化を被ることが着目されていること、ウィーナーに始まるサイバネティクス理論においてフィードバックというかたちで出力および入力エネルギーの相互性が問題にされていることなどから、その問題が自然科学のうちに取り込まれてきている、と言う人があるかもしれない。このような傾向は、エタイシヨウを拡張すると同時に方法そのものを問いなおす自然科学の展開としては注目に値するけれども、その方向と延長で扱われるのは、人間経験のなかでは限られた範囲での、関係の相互性にすぎない。

それにしても、^c近代科学がこれほどまでに人々に信頼され、説得力をもったのは、なにゆえであろうか。古今の数ある理論や学問のなかで特別の位置を占めたのは、なにゆえであろうか。その点についての議論も、のちに本論中で詳しく展開するが、あらかじめ私見の輪郭を披露しておこう。すなわちそれは、一口で言えば、近代科学が十七世紀の〈科学革命〉以後、〈普遍性〉と〈論理性〉と〈客観性〉という、自分の説を論証して他人を説得するのにきわめて好都合な三つの性質をあわせて手に入れ、保持してきたからにはかならない。これらの三つの性質は、それまでの多くの理論にも個別的には見られたものの、互いに相容れず、両立できないと見なされていた。ところが、近代科学の誕生においてはじめて、それらは、結びつけられ、統一されることによって異例の力を発揮するようになったのである。

まず〈普遍性〉とは、理論の適用範囲がこの上なく広いことである。例外なしにいつ、どこにでも妥当するということである。だから、そのような性格をもった理論に対しては、例外を持ち出して反論することはできない。原理的に例外はないのだから。次に〈論理性〉とは、主張するところがきわめて明快に首尾一貫していることである。理論の構築に関し

ても用語の上でも、多義的な曖昧さを少しも含んでいないということである。したがって、そのような性格をもった理論に対しては、最初に論者によつて選ばれた筋道によつてしか、問題が立てられず、議論できないことになる。最後に〈客観性〉であるが、これは、或ることが誰でも認めざるをえない明白な事実としてそこに存在しているということである。個々人の感情や思いから独立して存在しているということである。だから、そのような性格をもった理論にとつては、物事の存在は主観によつては少しも左右されないということになる。

しかしながら、〈現実〉とは、このように近代科学によつて捉えられたものだけに限られるのだろうか。というより、このような原理をそなえた理論によつて具体的な現実が捉えられているだろうか。否であろう。むしろ、近代科学によつて捉えられた現実とは、基本的には機械論的、力学的に選り取りられ、整えられたものにすぎないのではなからうか。もしそうだとすれば、近代科学の〈普遍性〉と〈論理性〉と〈客観性〉という三つの原理はそれぞれ、なにを軽視し、無視しているのだろうか。それらは、なにを排除することによつて成立しえたのだろうか。そこでこんどは、そのことを考えてみる必要がある。

(中村雄二郎『臨床の知とは何か』より)

* 出題の都合上、原文の一部分を改変してあります。

問1 傍線部ア～エのカタカナで示した語と同じ漢字を書くものを、それぞれ後の1～4の中から一つ選びなさい。

ア キセイ

- 1 キセイをそがれる
- 2 キセイを発する
- 3 お盆にキセイする
- 4 キセイ概念

イ セイチ

- 1 偉人のセイチを訪ねる
- 2 キリスト教のセイチ
- 3 セイチを極める
- 4 土盛りしてセイチする

ウ シンコク

- 1 確定シンコクをする
- 2 シンコクな事態におちいる
- 3 器物損壊罪はシンコク罪である
- 4 日本はかつてシンコクと自称した

エ タイショウ

- 1 攻撃のタイショウとなった
- 2 左右タイショウに作る
- 3 競技会でタイショウを獲得した
- 4 原文と訳文をタイショウする

問2 空欄に最も適する文を、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 集まった人々にあたるのは、常連のさまざまな華々しい〈現実〉であり、主人公にあたるのは理論や学問である。
- 2 集まった人々にあたるのは、常連のさまざまな華々しい理論や学問であり、主人公にあたるのは〈現実〉である。
- 3 控えめな男の祝いの会を主催した人にあたるのは〈現実〉であり、集まった人々にあたるのは理論や学問である。
- 4 控えめな男の祝いの会を主催した人にあたるのは理論や学問であり、集まった人々にあたるのは〈現実〉である。

問3 傍線部A「現実への妥当性について答がはつきり出るといふ結果になった」とありますが、どのような結果が出たと考えられますか。最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 現実への妥当性が考慮された。
- 2 現実への妥当性が無視された。
- 3 現実への妥当性が肯定された。
- 4 現実への妥当性が否定された。

問4 傍線部B「現実や人間経験とのずれの方を見ない」とありますが、このことによつてどのようなことが起こりましたか。次のi・iiについて、それぞれ本文から二十五字以内で抜き出しなさい。

- i 自然科学の分野
- ii 近代医学の分野

問5 傍線部C「近代科学がこれほどまでに人々に信頼され、説得力をもったのは、なにゆえであろうか」とありますが、筆者が考える理由を説明した文として最も適するものを、次の1〜4の中から一つ選びなさい。

- 1 〈普遍性〉と〈論理性〉と〈客観性〉が結びつけられ統一されて異例の力を発揮したから。
- 2 〈普遍性〉と〈論理性〉と〈客観性〉が互いに相容れずに両立できないとみなされたから。
- 3 〈普遍性〉と〈論理性〉と〈客観性〉がそれぞれ他人を説得するのに好都合であったから。
- 4 〈普遍性〉と〈論理性〉と〈客観性〉が理論や学問のなかで特別の位置を占めていたから。

問6 傍線部D「近代科学の〈普遍性〉と〈論理性〉と〈客観性〉という三つの原理はそれぞれ、なにを軽視し、無視しているのだろうか。それらは、なにを排除することによって成立しえたのだろうか」とありますが、軽視・無視・排除されなかつたと考えられるものを、次の1〜4の中から一つ選びなさい。

- 1 生命現象
- 2 現実や人間関係
- 3 明白な事実
- 4 関係の相互性

第二問 次の文章を読んで、後の問い（問1〜7）に答えなさい。

作家・井伏鱒二氏に、ファンレターを送った。上高地の絵葉書に、私のものなど読まない方がよいですよ、と記されて返事がきた。

私は、先生のご機嫌を損じたようである。そう感じた。あんな手紙、出さなければよかった、と悔いたが、あとの祭と
いうものである。

私は先生の文章の非を打ったのである。なんと大それた真似をしたものであろう。先生の誤字を指摘したのである。ファンレターといえるものではない。

先生のご返事をなんとしてもいただきたい、という下心があった。それで質問の形をとった。質問の内容がよくない。揚げ足取り、である。

なぜこんな手紙を書いたか。書く気になったか。実は伏線があった。

私は中学時代、いろんな新聞や雑誌に、作文や詩歌を投稿していた。ある時ひどくセンチメンタルな詩が入選し、雑誌の巻頭に掲載された。するとNという同年の女生徒から、ファンレターをもらった。それがきっかけで、Nとは以来ずっと文通を続けていた。彼女は大阪の名門私立高校に通っていた。手紙のやりとりだけで、会ったことはない。

そのNが、口ごもるような口調の手紙をよこし、あなたの文章は誤字が多く読みづらい、というのである。異性に注意されて、私は度を失った。こんな恥ずかしいことはなかった。顔から火がでる思いだった。

しかしNは優しかった。自分にも間違いがあるはずだ。気づかずに独りよがりを書いていくかも知れない。今度お互い
に間違いを教えあいましょう。良い勉強になるはずだ。そう言って慰めてくれた。

Nのおかげで、私は慎重に文をつづるようになった。うる覚えの文字は、いちいち辞書に当って記した。私は『広辞苑』
を一ページから読んでいたくせに、言葉の意味を知ることには夢中で、文字の形を見るのを疎かにしていたのである。

勉強のつもりでNの手紙を読むと、Nにも誤字や当て字が結構あった。私が勇んでそれを正すと、ありがとう、恥ずかしいけど嬉しかった、遠慮なく注意してね、とすぐ返事がきた。

毎回のようにNのそれには、必ず一字か二字の誤りが見つかった。時に、同じ文字がくり返されたので、私はNの粗相と怠惰を叱責した。私の方では、ほとんど彼女の指摘を受けることはなくなっていた。あなたには負けました、私はまだまだ勉強が足りない、でも気をゆるめないうで監視しあいましょう、と返事がきた。

その返事にも、一字、誤字があった。ここに至って私はNの作意に気がついたのである。彼女は、さりげなく私を教育してくれていたのだ。

それはともかく、Nの提言以来、私は用字法に非常に細心になった。すると当然ながら、人の欠点が目につくようになった。

井伏鱒二氏の文章を書き写して、至るところに非を見つけたのも、そのようなノミ取りまなこの折だったのである。創元社刊の『井伏鱒二作品集』第四巻の収録作を槍玉に上げた。

さきごろ、この作品集を入手した。一冊ずつ、なつかしい思いでページをくついていた。第五巻をめくっていたら、一枚の紙片がはさまっている。いわゆる正誤表である。

何気なくのぞいて、アッ、と驚いた。正誤表は、第四巻についてのものだったからである。

「お詫び 前回配本いたしましたこの作品集の第四巻に、多くの誤植がございましたことは、御購読下さつてゐる皆様及び著者に対しまして誠に申し訳なく、謹んでお詫び申し上げますとともに、左の如く夫々訂正させていただきます。尚、三巻までの分にはこの様なことはなく、今後発売の分につきましては、特に校正を厳密に致します事を、併せてここに申し上げます次第でございます。」との口上のあと、あるわあるわ、計四十六個所もの誤りが正されている。

井伏氏が間違つたのではない。校正者が手を抜いたためのミスである。三巻までの分には誤植がない、というから、この巻に限って何事か手違いが生じたのであろう。それを知らずに、私は井伏氏を論難した。知らぬことはいえ、浅はかな所行であつた。井伏氏は不快であつたらう。

正誤表をながめているうちに、私は思ひだした。

たとえば「丑寅爺さん」の小説で、「子供が学校で、ほかり子供から妙な目で見られるのが可哀さうだと云ふのである。」という文章があるが、「ほかり子供」の意味がわからない、と私は井伏氏にたずねたのである。

正誤表によれば、これは「ほかの子供」の間違いで、単純な誤植なのであった。

他に、「聚落第」とあるが、「聚楽第」が正しい表記ではないか、と私はDしたりげに書いた覚えがある。正誤表に、それもちゃんと出ている。

つまりこういうことだった。私がテキストに用いた古本の『井伏鱒二作品集』には、正誤表がついていなかったのである。一枚の紙きれであるから、本書の旧蔵者が粗末にしたのであろう。古本をテキストに使うと、こういう思わぬ落とし穴があるわけだ。

正誤表で思いだした。そのころ誤植のある本だけを集めている伊東さんという客がいた。

どうやってそういう本を見つけるのか、と聞くと、正誤表の有無で判断するしかない、と苦笑した。巻末についていたり、はさみこみのチラシである。しかしこれのついている本は、よほど良心的で、多くは恥をおおやけにしたがらない、と語った。

伊東さんは校正を職としている方で、そうと聞けば誤植の本の収集も決してF奇矯ではない。

三十代のなかばであったか。一度遊びにおいで、と誘われた。月島の一丁目だったか二丁目だったか、裏通りの仕舞屋しもたやの二階に間借りしていた。

格子戸を開けると、老人夫婦が食事をしていた。二階にあがると、伊東さんも食事をしている。私は時分どきに訪ねたのではなかった。

「この家は昼食が十一時なのだよ」伊東さんが小声で言った。「年よりに合わせないと機嫌が悪いのだよ」とつけ加えた。賄い付きの下宿らしい。お菜は里芋の煮ころばしであった。伊東さんがなんだか偉く老けて見えた。部屋中、本だらけである。全部、誤植の本である。

三十代の女性があがってきて、茶を入れてくれた。階下の娘と名のつた。「嫁に行ったがうまくいかなかったらしい」と伊東さんが、女性が降りたあとと急いでささやいた。

その次に遊びに行ったら、伊東さんは階下に住んでいた。老夫婦と、住いを交換したという。「何しろ本が重くてね。二階がミシミシいうものだから」そうだろう、大層な量である。

そこに例の娘さんが出てきて、茶を入れてくれた。
「ワイフだ」と伊東さんが紹介したので、私はのけぞるほど驚いた。「娘さん」が引っこむと、伊東さんが腹が大きくなつたゼスチュアをした。

(出久根達郎『逢わばや見ばや』より)

*出題の都合上、原文の一部分を改変してあります。

問1 傍線部ア〜エと意味が類似した言葉を選び、太字の部分を漢字で書きなさい。

- | | | | |
|-----------------|-------------------|----------------|----------------|
| | ア | | イ |
| | 1 イ ミブカク | | 1 ケ ツジヨ |
| | 2 ガ クシキブカク | | 2 カ シツ |
| | 3 ヨ ウジンブカク | | 3 フ ソク |
| | 4 エ ンリヨブカク | | 4 ケ イハク |
| ウ | | エ | |
| 1 ボ ウリヤク | | 1 ハイ ビ | |
| 2 イ ト | | 2 キ ヨウミ | |
| 3 イ ヨク | | 3 キ ヅカイ | |
| 4 シ タゴコロ | | 4 フ アン | |

問2 傍線部A「大それた真似」の文中における意味は何か。その言葉として最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 大いに正論からずれた意見
- 2 大変よく似た感想
- 3 大家気取りの批評
- 4 大いに異なる指摘

問3 傍線部B「勇んで」とあるがなぜ勇んだのか。それを説明するのに最も適する切な言葉を、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 恥辱を受けた人にも誤字があり一矢を報いられると思って。
- 2 誤字を書くのは自分だけでないと自信を回復して。
- 3 誤字を見つけることに意味があると思えば使命感をもって。
- 4 発見が困難な誤字を見つけて達成感をもって。

問4 傍線部C「浅はかな所行であった」とあるがなぜそう思うのか。それを説明した言葉として最も適するものを、次の

1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 出し抜こうという浅慮から偉大な人を批判したから。
- 2 正当性を確かめもせず違法な行為をしたから。
- 3 しっかり判断もせず過剰の批判をしたから。
- 4 しっかり確かめもせず批判すべき相手を間違えたから。

問5 傍線部D「したりげに」とはどういう気持ちか。それを説明した文として最も適するものを、次の1～

4の中から一つ選びなさい。

- 1 得意な気持ちで。
- 2 困らせる気持ちで。
- 3 批判的な気持ちで。
- 4 教え諭す気持ちで。

問6 傍線部Eの「苦笑した」のはなぜか意味か。それを説明した文として最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 分かり切ったことを真面目に質問されたから。
- 2 正誤表の有無で判断するという自慢できる話でないから。
- 3 判断する基準が一つしかないという貧弱な話だから。
- 4 もっと深い根拠を説明したいのに出来なかったから。

問7 傍線部Fの「奇矯ではない」と判断する理由は何か。それを説明した文として最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 校正の研究のために誤植の本を収集する必要があるから。
- 2 誤植を許さぬ正義感から誤植の本に注目するのは正当だから。
- 3 校正職なので誤植の本に興味を持つのは理屈に合っているから。
- 4 その人の性格から考えて当然あり得ることだから。

第三問 次の文章を読んで、後の問い（問1〜6）に答えなさい。

マングローブ (mangrove) というのは、熱帯・亜熱帯の海岸水域、とりわけ潮の干満の影響を受ける河口周辺、河川沿いに発達する塩生植物の森林を言う。^A マングローブの樹種は専門家によっても一定ではなく、三〇種から八〇種程度と言われる。主な樹種としてはヒルギ科のヤヤマヒルギ、オヒルギ、メヒルギ、ヒルギダマシ科のヒルギダマシ、ヒルギモドキ、センダン科、ハマザクロ科の植物などである。ニッパヤシをマングローブに含める人もいる。マングローブは体内塩分を排出させるため、空气中に気根（呼吸根）を出す特異な植物として知られるが、その気根にはタコの足のような支持根のほかに、土中からタケノコのように突き出す形、折り曲げた膝のような形がある。ヒルギ科の樹は、果実は実っても種子は種子として形成されず、胚が直接発生しはじめ、木についたまま担根体を生じ、棒状の果実をぶら下げたような格好になる（胚生種子）。なかには先端が鋭く尖った胚生種子もあり、落下すると地上につきささって、そこから発芽をはじめめる。

しかし、日本では奄美大島以南にしかないので、マングローブ林と人との関わりには関心があまり寄せられてこなかった。熱帯林というと山の熱帯林であれ、海辺のマングローブ林であれ、人が関わりにくい「猖獗しやうけつの地」の代表格のように考えられてきているが、これはおそらく「温帯人」の勝手な思い込みかもしれない。森は「恐怖の地」でもあるが、実は同時に「^B豊饒とんねうの地」でもある。現に各種の熱帯のエビは、マングローブ林を稚エビから親エビに育てゆく際の生育場所になっている。マングローブガニと呼ばれるノコギリガザミやムツゴロウもいる。貝もたくさん棲息している。貧栄養になりがちな熱帯の土壌のなかでは、マングローブ林というのは、落ち葉で養分が補給され、川の上流から栄養豊富な水が流れ込んでくる場所でもある。

だから熱帯の人びとはこのマングローブ林と昔から関わって、それを巧みに利用してきた。ここは天然の隠れ家であり、海の防波堤でもあり、海産物の供給地でもあった。東南アジア島嶼部の海民たちは、このマングローブ林を隠れ家にして海賊からの難を逃れたり、自ら海賊をしたりしていた（詳しくは、鶴見良行、一九九四）。漁民は魚や甲殻類を採取するだけでなく、マングローブ樹を薪や木炭などの燃料供給源にもしてきた。さらに、長い年月をかけて、このマングローブ林に手を加え、そこを塩田として利用したり、さらには養殖池に造りかえてきたりした。

マングローブ林の生い茂る海辺は、一般的には川と海が交差する浅瀬だ。河口付近は上流から土砂が堆積した浅瀬である。この浅瀬の海辺で、潮の干満を利用して塩田が造られたのがいつ頃のことかは分からないが、かなり古い時代と思われる。塩田というくらいだから田んぼ(水田)を造る技術が先行してあったのかもしれない。

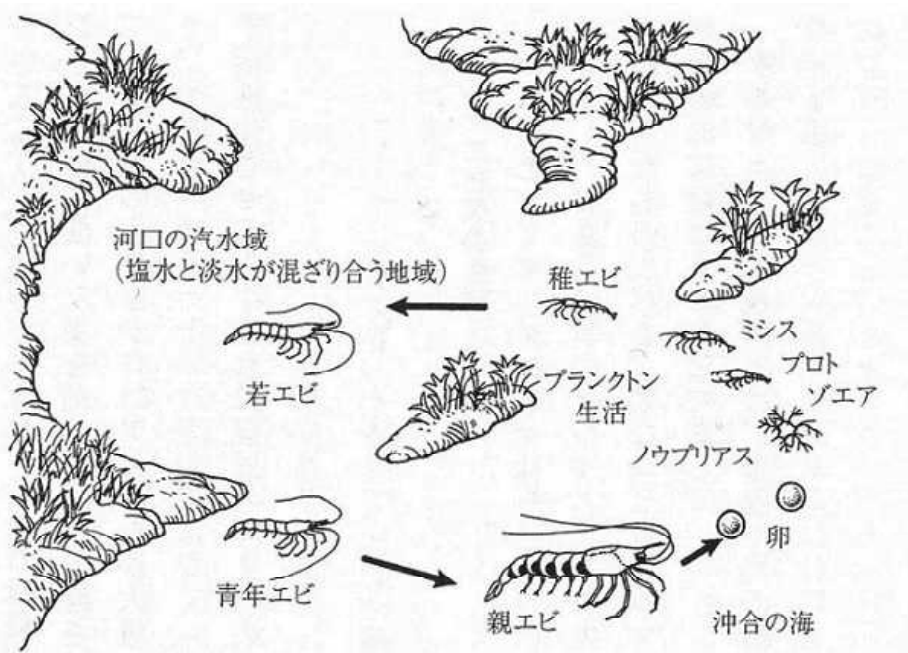
一方、海辺に石などを積み、囲いにして魚を捕獲したり養殖したりする漁業は南太平洋のポリネシアから日本に至るまで広く昔からあったという。海洋民族学者の西村朝日太郎さんは、この漁業の方法を、①石干見、②石積養魚池、③石漚の三つに分けている(西村、一九七四)。ジャワには一四世紀頃にはすでに海辺の養殖池があったとの記録がある(Shuster、一九五〇)。西村さんは塩田と養殖池の関連性に言及していないが、ジャワではおそらく塩田が石積養魚池の役割を果たしたのではないかとわたしは思っている。そして塩田は水田稲作の応用として発展していったのではないかと考えられる。

わたしは何度も東ジャワの養殖池を見ているが、グレシクという地方では、乾季に塩田、雨季にエビ養殖というパターンがまだ生きている。そのグレシクはブンガワン・ソロ(ソロ川)がジャワ海に流れ込む地域である。ここで百数十ヘクタールもの広大な養殖池を経営するアムナンさん(故人)の養殖方法を見て「これは農民の発想だ」と思ったことがある。つまり、アムナンさんは池に湧いた藻を刈り取り、乾燥させ、それを池の有機肥料にして池の栄養循環を図っていた。池の土のなかにはアカムシが大量に育つ。これをブラックタイガーが餌にする。つまり、エビを「獲る」という発想ではなく、「C」のだ。草刈りをして、有機肥料を作り、土を活性化させる——これは農民の考えそのものではないだろうか。

Cエビにとってマングローブ林とは何なのか。図2-2を見ていただきたい。商品価値がもつとも高く、貿易量の多いクルマエビ属の生活史を描いた図である。

わたしたちの食べる主要なエビはクルマエビ属であると述べた。そしてその多くは熱帯・亜熱帯の海に棲息するエビである。

クルマエビ属の親エビは、大陸や島の沿岸の陸棚に生活する。クルマエビ属を色によってホワイト系、ブラウン系、ピンク系に分ける見方があると述べたが、この分類によると、一般的にブラウン系(ブラックタイガーなど)、ピンク系のエビは砂泥に潜る(特に昼間)定住型体質を持ち、集群性はないとされる。それに対し、ホワイト系は放浪型、大群をなして移動するという。バナメイはホワイト系であるから、地底に生活するというより泳ぎ回る。だから養殖する場合も、ブラック



出所) Mujiman, Ahmad, *Budidaya Udang Putih*, Jakarta: Penebar Swadaya, 1982 および酒向昇「えび——知識とノウハウ」水産社, 1979 を参考に作成. 「エビと日本人」より再掲.

図2-2 クルマエビ属の生活史

タイガーのように地底面積で密度を考えず、水の容積で考えられると業者の人は言う。ブラウン系はホワイト系より沖合の比較的水の澄んだところに棲息すると言われるが、それでもけっして深海に棲むものではなく、陸棚が生活の舞台である。D トロール船が浜のごく近くで網を引くのは、このためである。

雌エビは驚くほど多くの卵を産む。日本のクルマエビで二〇〇七〇万粒、ブラックタイガーの場合、平均五〇万粒、最高で一〇〇万粒も産むそうだ。卵は半日ほどで、エビとは似ても似つかぬプランクトンになる。プランクトンは、成長、脱皮の段階に応じて、ノウプリアス (Nauplius) — プロトゾエア (Protozoa) — ミシス (Mysis) — ポストラーヴァ (Postlarva = PL) という名がつけられている。ポストラーヴァは、もう稚エビである。クルマエビ属は、およそ一カ月のプランクトン生活をし、ポストラーヴァに成長、この稚エビの段階が一五日ほどである。卵からプランクトンとなるにしたがって、彼らは潮流に乗って海岸の浅瀬に近づいてくる。そこがマングローブ林の汽水域なのである。そこで稚エビは若エビとなり、やがて青年エビに成長すると沖合に出てゆき、そこで親エビになる。「マングローブなくしてエビなし」(No mangrove, No prawn) と言われるように、マングローブ林はエビの保育園のような役割を果たしているのである。日本でもカキを育てるために森の役割が大事であることが認識されているが (畠山重篤、二〇〇六年)、熱帯・亜熱帯でも同じことである。

日本産のクルマエビは、このサイクルをおよそ二年かけて循環する。つまり二年の生涯である。これに対し、熱帯水域で

育つクルマエビ属の多くは十数カ月の寿命だという。

言うまでもなく、卵がすべて親になるのではない。プランクトンの段階でも稚エビの段階でも、数多くの「犠牲者」が出る。魚に食べられることが多い。自然環境のなかでは、一万粒の卵のうち、稚エビになるまで生き残るのは一五尾にも満たないとされる。マングローブ林は、沖合に比べれば安全度は高い。しかし、そこにも干潟に棲むハゼ類が待ち受けている。それだけではない。三角の網を持った人間サマも待ち受けているのだ。親エビを連れてきて産卵させ、孵化させ、稚エビに育てる孵化場（ハッチェリー）が今や主流になっている。しかし、海辺に泳ぎ着く稚エビを三角網で獲り、養殖池に売ることも零細な、もつとも末端のエビ漁民がインドネシアにはまだたくさんいる。

人間は賢いのか賢くないのか分からなくなる。マングローブ林は稚エビの保育園のようなところなのに、マングローブを刈りとってそこを養殖池にして、よそで育てた稚エビを放流し、大きくする。環境としては最適かもしれない。しかし育つ場所をなくしたエビはやがて減ってしまう。とりわけ一九八〇年代以降に広がった集約養殖池は、自然から大きくはみ出し、餌も人工的に作り、大量投餌により大量生産をしようとする。一時的に大量生産に成功し、にわか成金が増える。しかしその結末は^F「思わぬ悲劇へとつながっていく。やはりあまり賢くないのかもしれない」。

「自然の保育園を工場にする」、それがマングローブ林の伐採であり、集約養殖池の造成である。すでに至るところで指摘されているが、この二〇〇〇〜三〇〇年の間にマングローブ林は急速に減少しつつあり、それはエビの養殖池造成と大きく関わっているといつてよい。

（村井吉敬『エビと日本人Ⅱ』より）

*出題の都合上、原文の一部分を改変してあります。

問1 傍線部A「マングローブの樹種」の共通した特徴について、最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 体内塩分を排出させるため、空气中に気根（呼吸根）を出す特異な形をしている。
- 2 果実は実っても種子は種子として形成されず、胚が直接発生し、木についたまま担根体を生じ、棒状の果実をぶら下げたような格好になる。
- 3 先端が鋭く尖った胚生種子があり、落下すると地上につきささって、そこから発芽をはじめめる。
- 4 主に温帯の海岸水域、とりわけ潮の干満の影響を受ける河口周辺、河川沿いに発達する。

問2 傍線部B「豊饒の地」の説明として適さないものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 稚エビから親エビに育っていく際の生育場所となるから。
- 2 落ち葉で養分が補給され、栄養分豊富な水となるから。
- 3 果実を実らせ、それがマングローブガニ等の食料になるから。
- 4 薪や木炭などの燃料にすることができたから。

問3 Cに入る言葉として最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 作る
- 2 釣る
- 3 囲い込む
- 4 育てる

問4 傍線部D「トロール船が浜のごく近くで網をひく」理由として、最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 クルマエビ属の親エビは、ホワイト系、ブラウン系、ピンク系すべて、大陸や島の沿岸の陸棚で生活しているから。
- 2 ブラックタイガーに代表されるブラウン系は、沖合の比較的水の澄んだところで生活しているから。
- 3 バナメイに代表されるホワイト系は、地底に生活するというより泳ぎ回りながら生活しているから。
- 4 ピンク系のエビは砂泥に潜る（特に昼間）住型体質を持っていて、集群性なく生活しているから。

問5 傍線部E「稚エビ」はどこで成長するのだろうか。問題中の語句を使って、六文字以内で抜き出しなさい。

問6 傍線部F「思わぬ悲劇へとつながっていく」とあるが、その理由として最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 マングローブ林が不足することで、生活環境が悪化してしまう。
- 2 エビの生産性が落ちてしまい、収益が上がらなくなってしまう。
- 3 集約養殖池の造成が増えることで、貧富の差が生じてしまう。
- 4 よそで育てた稚エビを放流することで、交雑が行われてしまう。